高麗川の虫たち

みなさんは高麗川をご存じですか？ふるさと坂戸を流れるこの川は、県下有数の清流であり、わたしたちにとってかけがえのない財産といえます。

そして高麗川は、ただ単に「清流」という言葉では言い尽くせないほどの、たくさんの魅力に満ちあふれています。それは、市街地のすぐそばを流れる川とは思えないほどの、自然の豊かさです。高麗川ではたくさんの昆虫や魚、野鳥などを観察することができます。チョウについて言えば、年間をとおして毎年50種類以上観察することができます。その中には、ウラゴマダラシジミやヒオドシチョウなど、埼玉県レッドデータブックに記載されている貴重な種類も多く含まれます。

さて、ほとんどのチョウは、幼虫の時期に植物を食べて成長しますが、それぞれ食べる植物の種類が異なります。つまり、チョウの種類が多ければ、それだけ植物の種類も多いということになり、植物の種類が多い分、より複雑な生態系を形作っている、と考えられます。このことは、チョウだけでなく、他の昆虫や魚、野鳥など生き物全般にいえることだと思います。

この素晴らしい自然を保全していくために、私たちはどうすればいいのでしょうか？それには、まず高麗川の自然の豊かさを知ることだと思います。さあ、手始めにこの冊子を持って、高麗川を歩いてみましょう。きっと、宝石のような美しい虫たちに出会えることでしょう。

春

高麗川で、春まっさきに姿を見せるチョウはモンキチョウです。そのあとモンシロチョウやスジグロシロチョウ、ベニシジミなどいろいろなチョウが飛びはじめますが、春の高麗川を代表するチョウといえば、やはりツマキチョウでしょう。なぜなら、他のシロチョウ類は春から秋まで長い期間観察できるのに対し、ツマキチョウの成虫は、春の一時期しか姿を見せないからです。

そして、春のチョウがひととおり姿を見せたころ、高麗川ではサナエトンボの仲間が、続々と羽化を始めます。

モンキチョウ

高麗川では早い年だと 2月の初めには成虫が姿を見せます。

メスは白色型といって翅の色がオスに比べて白っぽい個体が多いのですが、なかには黄色型といってオスと同じ黄色の個体もいます。

ツマキチョウ

成虫は春しか姿を見せません。春に羽化した成虫はすぐに卵を産み、孵化した幼虫は成長し蛹になりますが、そのまま夏・秋・冬を蛹のままで過ごし、翌年の春に羽化するからです。

幼虫は、ショカツサイなどの野生のアブラナ科の植物を食べて成長します。チョウの幼虫はふつう植物の葉を食べますが、ツマキチョウの幼虫は、花や実も食べます。

ツマキチョウ幼虫

ツマキチョウのメスは、翅の先まで白く、黄色い部分がありません。

オス、メスともに裏面の網目模様が特徴です。

モンシロチョウ

モンシロチョウとスジグロシロチョウは、同じシロチョウ科のチョウでアブラナ科の植物を食草としていますが、モンシロチョウの方がキャベツやダイコンなどの栽培植物を好むのに対し、スジグロシロチョウは野生のアブラナ科の植物を好みます。

スジグロシロチョウ

春の高麗川では、モンキチョウ・ツマキチョウ・モンシロチョウ・スジグロシロチョウと、成虫で越冬したキタキチョウを加えてシロチョウ科のチョウを5種類観察できます。そのなかで、モンキチョウのメス(白色型)・ツマキチョウ・モンシロチョウ・スジグロシロチョウの 4種は、飛んでいるときは、みな翅が白く見えるので、なかなか見分けがつきません。みんなひっくるめて「モンシロチョウ」と思っている人が多いのではないでしょうか？一度チョウが止まっているところを、よく観察してみてください。それぞれ特徴があるので、ちゃんと区別することができます。

シジミチョウのなかまも春の早い時期から羽化します。高麗川では、ベニシジミ・ヤマトシジミ・ツバメシジミ・ルリシジミ・トラフシジミ・コツバメの 6種が観察できますが、コツバメは城山橋より下流では見たことがありません。

ベニシジミ

春から秋にかけて何度か羽化を繰り返しますが、春に羽化した個体の翅の赤が一番鮮やかに見えます。

ツバメシジミ

高麗川では、普通に見られるチョウです。オスの表面がメタリックブルーに輝くのが印象的です。

ヤマトシジミ

食草はどこにでも見られる雑草のカタバミなので、高麗川だけでなく市街地でも普通に見られます。どこにでも見られるチョウだからといって、馬鹿にしないでください。よく見れば翅は美しいし、オス・メスとも季節により翅の装いが変化します。

トラフシジミ

トラフシジミは、春に羽化する個体と夏に羽化する個体で色合いがだいぶ違います。

でも、模様は同じです。

ルリシジミ

高麗川では、ヤマトシジミやツバメシジミに比べて、個体数は少ないようです。

写真のように翅を開いて止まることは、めったにありません。

コツバメ

成虫は春先しか姿をあらわしません。

1年のうち、ほとんどを蛹で過ごします。

埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。

アゲハチョウの仲間は、モンキチョウやベニシジミなどより少し遅れて姿をあらわします。

高麗川では、アゲハチョウ・キアゲハ・ジャコウアゲハ・クロアゲハ・アオスジアゲハが普通に見られ、まれにカラスアゲハ・モンキアゲハ・ナガサキアゲハも見られます。また、ウスバシロチョウは、春しか姿を見せません。

アゲハチョウ

キアゲハ

アゲハチョウの仲間は、春に羽化する個体と夏以降に羽化する個体で、大きさに違いがある種類が多いようです。春に羽化する方が小さく、夏の大きな個体と比べると、まるで別種に見えるものもいます。

環境学館いずみと桜中の境のフェンスに、食草のウマノスズクサが生えており、毎年そこで発生を繰り返しています。

左の写真はメスで、オスは全体に黒っぽい翅をしています。

ジャコウアゲハ

卵

幼虫

蛹

ウマノスズクサの花

ウスバシロチョウ

名前はシロチョウですが、アゲハチョウの仲間です。このチョウは1年のほとんどを卵で過ごし、成虫は春しか姿を見せません。

ウスバシロチョウの卵です。食草はムラサキケマンですが、4月の早い時期に成長を終え、ウスバシロチョウが産卵する5月には、地上から姿を消してしまいます。そのため、ウスバシロチョウは来年ムラサキケマンが芽を出しそうな場所の近くの、地面に落ちている木の枝などに産卵します。

ギンイチモンジセセリ

セセリチョウの仲間は地味な種類が多く、ガの仲間と勘違している人もいるようですが、チョウの仲間なのでお間違いなく。

表面は、こげ茶色一色の地味で目立たないチョウですが、裏面は

名前のとおり銀の一文字が鮮やかです。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。夏にも羽化しますが、残念ながら裏の銀一文字が目立たなくなります。

ミヤマセセリ

名前に「深山」とついていますが、深い山に行かなければ見つからないわけではなく、平地にもいます。成虫は春先しか姿をあらわしません。

埼玉県レッドデータブックで「絶滅危惧ⅠA類」に指定されています。

高麗川では、春になるとホンサナエやアオサナエ、ヒメサナエ、オナガサナエなどサナエトンボの仲間が続々と羽化を始めます。堤防の上の遊歩道ではなく、なるべく川に近いところを歩くと、足元の草むらから、羽化したばかりの個体がふわふわと飛び立つのを観察できます。

夏

高麗川の夏は、まさに虫たちの天国です。人間にとって暑い夏は体にこたえますが、虫たちにとってはなんでもないようで、さまざまな昆虫が活発に活動します。

さて、夏の高麗川を代表するチョウといえば、コムラサキがあげられます。コムラサキは登山道途中の沢沿いでよく見かけるので、山のチョウという印象が強いのですが、高麗川の河畔林にはコムラサキの食樹であるヤナギの仲間がたくさん分布しているため、平地でも普通に見ることができるのです。

コムラサキ

高麗川から越辺川にかけて広く分布しますが、数は多くありません。光線の角度によって、オスは紫色に輝きます。メスは残念ながら輝きません。

昆虫の足は6本ですが、左の写真では4本にしか見えません。じつはコムラサキに限らず、タテハチョウ科のチョウは前足が退化しているため、4本に見えるのです。

ウラゴマダラシジミ

低木のイボタノキが食樹ですが、高麗川の河畔林内には比較的多いので、ウラゴマダラシジミも普通に観察できます。イボタノキの花によく集まるので、イボタノキを目当てにすれば見つかると思います。埼玉県レッドデータブックで「絶滅危惧ⅠA類」に指定されています。

アカシジミ

初夏にクヌギやコナラの雑木林で見かけるチョウです。高麗川の河畔林でもクヌギやコナラは分布しており、アカシジミも見ることができます。早朝は林の下草におりていることがありますが、日が昇ると樹上に移ってしまうので、見つけにくくなります。

ウラナミアカシジミ

アカシジミ同様、高麗川の河畔林で見られます。裏の複雑なゼブラ模様が特徴です。

ミズイロオナガシジミ

このチョウもアカシジミ、ウラナミアカシジミ同様、雑木林のチョウです。いずれも成虫は初夏の一時期しか見られず、一年のほとんどを卵の状態で過ごします。

トラフシジミ

春に羽化した個体（６ページ）と比べてみてください。虎斑の模様はいっしょでも、全体の色合いが違います。

キタキチョウ

夏と秋に羽化します。モンキチョウと同じく、止まっているときは必ず翅を閉じているので、表面は飛んでいる時しか見られません。

左がオス、右がメスです。

ヒメウラナミジャノメ

春にも羽化しますが、夏の方が数が多いです。夏に高麗川を歩くと、このチョウがどこにでもいて、目障りなくらいです。

ヒオドシチョウ

初夏に羽化し、しばらく活動した後、いつの間にかいなくなります。（どこかで休眠しているらしい）

次に姿を見せるのは、翌年の3月くらいになってからです。埼玉県レッドデータブックで「絶滅危惧Ⅱ類」に指定されています。

ウラギンヒョウモン

ヒョウモンチョウというと夏の高原を連想してしまいますが、このチョウは少ないながらも高麗川に生息しています。埼玉県レッドデータブックで「絶滅危惧ⅠA類」に指定されています。

ゴマダラチョウ

春にも羽化しますが、夏の方が個体数が多いようです。夏は樹液に集まるところをよく見ます。

アカボシゴマダラ

放蝶により、本来は分布しないはずの関東地方でも普通に見られるようになってしまいました。食樹が在来種のゴマダラチョウと同じエノキなので、競合が心配されます。

アサマイチモンジ

高麗川では、イチモンジチョウというそっくりさんもいますが、アサマイチモンジの方が数は多いようです。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。

アオスジアゲハ

食草(食樹)が公園や街路樹に植えられているクスノキなので、高麗川だけでなく街中でも観察できます。春にも発生しますが、個体数は少ないようです。

ゴイシシジミ

小型のシジミチョウでかわいらしい印象ですが、幼虫はチョウには珍しい肉食です。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。

幼虫はササの葉につくアブラムシを食べます。

ゴイシシジミ幼虫

アオハダトンボ

高麗川では、夏になるとハグロトンボが毎年たくさん発生しますが、ハグロトンボに先駆けて、晩春から初夏にかけてアオハダトンボが姿を見せます。体全体が金緑色に輝き、特にオスは翅まで輝きます。埼玉県レッドデータブックで「絶滅危惧Ⅱ類」に指定されています。

ホンサナエ

毎年城山橋周辺で、アオサナエとともに飛んでいるのを観察できます。埼玉県レッドデータブックで「絶滅危惧Ⅱ類」に指定されています。

ヒメサナエ

サナエトンボの仲間では、オジロサナエとともに小さい方です。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。

サラサヤンマ

高麗川に広く分布していますが、どこにでもいるわけではありません。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。

コヤマトンボ

左は羽化してまもない未成熟の個体です。成熟すると、下の写真のように複眼の色が金緑色に変わります。

コオニヤンマ

名前にヤンマがついていますが、サナエトンボの仲間です。高麗川では普通に見られます。後ろ足が非常に長いのが特徴です。

オニヤンマ

日本最大のトンボです。高麗川ではあまり見かけませんが、数年前、いつのまにか環境学館いずみに侵入してきて、驚かされたことがあります。

オニヤンマは、夏の終わりに産卵します。産卵の方法は豪快で、水面上に静止し、そこから水面下の泥の中まで一気に胴体を突き刺し、産卵します。

ハラビロトンボ

トンボの仲間は、オスとメスで色合いが違う種類が結構います。このトンボもシオカラトンボと同様、メスは「麦わら色」、オスは左の写真のように「シオカラ色」です。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。

ウスバキトンボ

このトンボは、遠い南の国から発生を繰り返しながら、北へ向かって分布を拡げていく習性を持っています。でも、冬の寒さに耐えられず、関東地方では越冬できません。それでも、毎年同じことを繰り返しているのです。坂戸市あたりでは、6月下旬～7月に姿を見せます。

ハグロトンボ

高麗川の夏を代表するトンボです。アオハダトンボが姿を消した頃に姿をあらわします。その後だんだん数を増し、夏の間さまざまなところで飛んでいるのを見かけます。写真は左がオス、右がメスです。

オオミズアオ

一般的にガの仲間は、チョウに比べていやな印象を持っている方が多いようですが、よく見ると美しい種類がたくさんいます。オオミズアオも、はっとするような鮮やかな水色の翅をもった、美しいガです。

ヒガシキリギリス

埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。高麗川を歩いていると、チョン・ギースという鳴き声をあちこちでよく耳にします。けれども草むらに隠れているため、めったに姿を見せることはありません。

ニイニイゼミ

高麗川では、毎年最初に鳴き声を聞くセミです。早いときは 6月の下旬から鳴き始めます。見事な保護色で私たちの目をくらませます。

アブラゼミ

ニイニイゼミが鳴き始めてしばらくすると、ミンミンゼミとともに鳴きだし、夏の間高麗川をにぎわせてくれます。

ミンミンゼミ

アブラゼミと同様夏の間うるさいくらい鳴いています。高麗川だけでなく、市内各地で声が聞こえます。

ヒグラシ

昼間はあまり鳴き声を聞きません。朝早くか夕暮れにカナカカナ…と美しい声を聞かせてくれます。市内の各所にいますが、ミンミンゼミやアブラゼミに比べて数は少ないようです。 でも、城山にはたくさんいます。

ツクツクボウシ

一番最後に現れ、一番最後まで鳴いているセミです。子どもの頃、このセミの声を聞くと「ああ、夏休みももう終わりだな」と感じた人も多いのではないでしょうか。

ノコギリクワガタ

雑木林のコナラやクヌギなどの樹液に集まりますが、高麗川では河畔林の柳の樹液でよく見られます。柳の樹液には、コクワガタやカブトムシなどの他の甲虫だけでなく、様々な昆虫たちが集まります。

さて、下の写真も同じノコギリクワガタですが、上の写真と比べてみてください。まるで別種と思われるぐらい、大あごの形状が違っています。この傾向は、他のクワガタムシも同様なものが多く、オスの体形の大小により、大あごの形状が違います。

ツノトンボ

名前にトンボがついていますが、トンボの仲間ではありません。

どちらかというとウスバカゲロウの仲間に近いです。長い触覚が特徴です。

上がオス、下がメスです。

ナナフシ

体全体が木の枝のようです。動きもゆっくりで、まるで枝が揺れているように見えます。

秋

高麗川の秋の主役は、アカトンボの仲間です。高麗川では、アキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ、ミヤマアカネ、リスアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボの7種を観察できます。トンボでは、他にカトリヤンマやミルンヤンマなども運がよければ観察できます。

チョウでは、ウラナミシジミが秋を代表するチョウといえます。ウラナミシジミは南方系のチョウですが、毎年発生を繰り返しながら北へ分布を拡げていきます。でも寒い地方では、冬の寒さに耐えきれず越冬できません。それでも毎年同じことを繰り返しているのです。坂戸市では9月下旬から10月初旬くらいに姿を見せます。

ウラナミシジミ

キタテハ

夏にも羽化しますが、秋に羽化した個体の方が数も多く、さっそうとした感じです。成虫で越冬します。

ミドリヒョウモン

毎年秋になると姿をあらわし、いつの間にかいなくなってしまします。秋に産卵しますが、食草のスミレではなく、木の幹などに産卵します。

ツマグロヒョウモン

このチョウを市内で初めて見たのは、平成18年8月の坂戸よさこいの日でした。それ以来毎年その数を増してきて、今では市内のどこにでもいる普通のチョウになっています。かつて分布は関東より南の暖かい地方と言われていたのに、いったいどうなっているのでしょうか？これも地球温暖化の影響なのでしょうか？

（上がメス、下がオス）

春から発生を繰り返していますが、秋に他のチョウが少なくなってきたときに、存在感を増すように感じます。

アカタテハ

ヒメアカタテハ

どちらも高麗川で普通に見られますが、アカタテハの方が見かける機会は少ないようです。

ルリタテハ

翅の表面がルリ色の美しいチョウですが、裏面を見てください。木の幹の模様にすっかり溶け込んでいて、なかなか見分けがつきません。クヌギなどの樹液によく集まるので、この保護色は結構有効かもしれません。

ウラギンシジミ

翅の裏面は、名前のとおり銀一色です。

表はオス、メスで色が違います。オスがオレンジ、メスは水色です。夏にも羽化しますが、秋の方がずっと目にすることが多いです。

ムラサキシジミ　　ムラサキツバメ

ムラサキシジミ、ムラサキツバメともに夏と秋に羽化しますが、秋の方が個体数は多いようです。ムラサキツバメは、かつては近畿地方以西の暖かい地方に分布していましたが、最近では坂戸市内でも普通に見られるようになりました。これもツマグロヒョウモン同様、地球温暖化の影響でしょうか？

マユタテアカネ

ミヤマアカネ

アキアカネ

ナツアカネ

リスアカネ

コノシメトンボ

高麗川で見られるアカトンボの仲間は、この6種とノシメトンボが普通に見られます。リスアカネとコノシメトンボは個体数が少ないようです。ノシメトンボは、雌雄ともに秋になっても赤く色づきません。

カトリヤンマ

高麗川遊歩道を歩いていると、いきなり草むらや木の枝からすーっと飛び立つので驚かされます。でも、すぐにヤブに入り込んでしまうので、写真を撮るのにはいつも苦労させられます。

ミルンヤンマ

名前の由来は、イギリスの地質学者ジョン・ミルン氏だそうです。高麗川ではあまり見かけないので、個体数は少ないと思われます。

トンボの複眼の色は、種類によっても違うし、オスとメスによって違うものもいて、様々な色に美しく輝いています。でも、残念なことに死んでしまうとこの輝きを失ってしまいます。

ショウリョウバッタモドキ

環境学館いずみのすぐそばの、高麗川の堤防でも見つけられます。ショウリョウバッタよりずっと小さく、飛び方も弱々しい感じです。埼玉県レッドデータブックで「準絶滅危惧」に指定されています。

トノサマバッタ

夏から秋にかけて、ショウリョウバッタや他のバッタとともに、高麗川の堤防を元気に飛び回っています。写真はオス、メスのペアですが、どちらがオスかわかりますか？

（答えは32ページ）

ハラビロカマキリ

オオカマキリやコカマキリとともに、高麗川の河川敷や堤防で普通に見られます。

冬

昆虫にとって、寒い冬は活動しづらく、ほとんどの種が活動を一時停止します。つまり冬眠です。その状態は卵、幼虫、蛹、成虫とさまざまで、越冬対策も種によってそれぞれ違います。

ツチイナゴ

バッタの仲間は卵で冬越しするタイプが多いですが、ツチイナゴは成虫で冬を越します。

ゴマダラチョウ

幼虫は、食樹のエノキの落ち葉にくっついて越冬します。

アカボシゴマダラ

ゴマダラチョウ同様、エノキの落ち葉にくっついて越冬します。

コムラサキ

幼虫は、食樹であるヤナギの木の幹や枝の割れ目に、体を入り込ませて越冬します。ですから、探すのが非常に困難です。

ベニシジミ

幼虫は、冬の間ギシギシなどの葉を食べながら成長し、春に羽化します。

ナナホシテントウ

テントウムシの仲間は、成虫で冬を越す種類が多いです。

30 ページの答え…上がオスです。トノサマバッタに限らず、バッタの仲間はメスの方が体の大きい種類が多いです。

坂戸市環境学館いずみ

令和３年２月１２日改訂